

71

『鍼灸施治姓名録』について ——幕末の岡山県邑久郡周辺における鍼灸記録——

松村 紀明¹⁾, 中島 洋一²⁾¹⁾帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科, ²⁾医療法人洋友会 中島病院

本発表で紹介する『鍼灸施治姓名録』をはじめとして、近世近代の貴重な医書を多数所蔵する中島（なかしま）家は、岡山県東南部、千町平野の邑久郡北地村（現瀬戸内市）にあって、近世後期以後、周辺地域社会の医療普及に貢献した医家である。もともと中島家の総本家は「一ノ神子」という家であり「神子職」の家であった。この総本家から分家し、医を家職とするようになったのが、現在まで続いている専門医家中島家である。

『鍼灸施治姓名録』を著した中島友玄（1808（文化5）年～1876（明治9）年）は、この専門医家中島家の第四世にあたる。友玄自らが1849（嘉永2）年に著した『中島姓一統家系』には、次のようなことが書かれている。

父の宗仙に従って医を学び23歳の時岡山藩池田信濃守御医者武井養貞の弟子となり、26歳のとき京師に遊学。吉益北州、小石元瑞、藤林泰祐、緒方順節に学んだほか、清水大学には産術、華岡青洲の門人高階清介には外科を学んだ。そして1853（嘉永6）年、46歳にして御目見医者になった。

つまり友玄は、広く医学を渉猟した後、父の宗仙と同様、岡山県邑久郡（現瀬戸内市）周辺で地域に根ざした医療活動を手広く行い、それによって御目見医者に任じられたようである。そして現在の中島家にもそれに関する文書が多数現存している。

本発表ではその文書の中から、『鍼灸施治姓名録』と表紙に書かれた4冊の文書を中心に紹介する。

『鍼灸施治姓名録』は、文久3（1863）年に邑久郡ならびにその周囲の郡の住人に対して鍼灸を施した際の治療記録である。冊子は地域別に4つに分けられており、それぞれに患者名、疾患名、鍼灸を施した経穴が書かれ、一覧になっている文書である。

同文書の内容は、当時広く行われていた鍼灸治療が、実際どのようなものであったのかを知るための一助となるものである。

また、友玄の他の医療活動と併せ、当時の医療のなかで鍼灸治療がどのように位置づけられていたのかを伺うための一助となると考える。